クロンララスクールに見る
インターネットを利用したオルタナティブスクールの試み

渡辺 哲郎
Tetsuo Watanabe
金沢大学大学院教育学研究科

黒上 晴夫
Haruo Kurokami
金沢大学教育学部

1. はじめに

近年、学校教育の中にインターネットを持ち込んだ様々な実践が行われている。またこれまでの通信教育の流れの上にインターネットを利用した学習教材も販売されるようになってきた。しかし本研究ではこうした形でのインターネットを利用した教育ではなく、ホームスクーリングを基本としたインターネット上の高等学校であるアメリカのクロンララスクールを取り上げ、この学校で行われているプログラムがどのような特徴を持っているのか、主に Web サイトから入手できる情報をもとに分析を試みる。また、参考として日本でクロンララスクールの単位認定を受けられる学習プログラム、インターネットハイスクール「風」についても触れる。

2. クロンララスクールについて

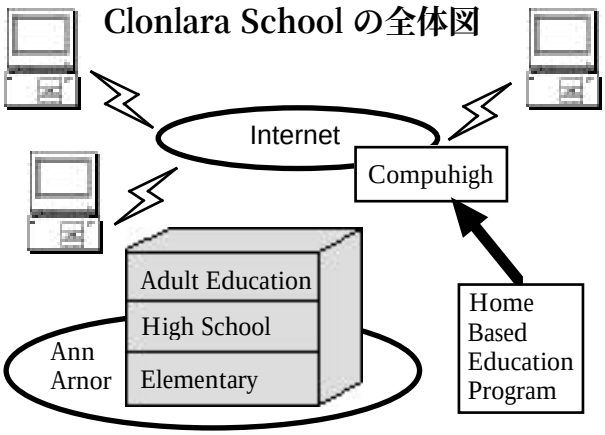
2-1 特徴

クロンララスクールは1967年、パット・モンゴメリー女史の手によって創設された、アメリカはミシガン州のアン・アーバー(Ann Arbor)市にある私立学校である。Elementary School から Adult Education まで包括的な教育プログラムを用意している。特徴的な点は、両親と生徒および教師が教育プロセスの当事者であり、彼らにこそ教育課程を決定する権利があるという理念と、これに基づいた Home Based Education Program が展開されていること、このプログラムのひとつのコースとして、インターネットを利用した Compuhigh プログラムが用意されていることである。

実際の学習においてはテストも教科書もなく(ガイドはあるが)Achievement Test は学習者の住居のある州の方針によっては義務だが、クロンララスクールの学習プログラム上においては義務ではない。

無論、他の通常の学校と同じように上級学校や大学などへの進学に通用する卒業資格を手に入れることができるし、転校の際にも基本的に支障はない。

Clonlara School の全体図



2-2 Home Based Education Program

クロンララスクールでの基本的な教育プログラムの構成は上の図のようになっている。ここで最も特徴的なものは先に挙げた Home Based Education Program と Compuhigh である。

まず Home Based Education Program であるが、これは一般的に広まっている「学習＝通学」概念を否定し、家庭で、親と生徒、教師の共同で学習プログラムを決定し、生徒は学校における諸々の束縛、強制から解放されて自分のペースで学習することができるようになっている。

具体的には Contact Teacher と呼ばれる教師が各家庭に割り当てられ、この Contact Teacher が学習プログラムの作成、学習成果の形成的な評価と記録について全面的なサポートを行う。

学習プログラムがこのように非常に高度に個別化されているので、その評価において学習記録を詳細に残すことが非常に重要になってくる。家庭での学習成果は逐一報告しなければならない。この報告をもとに、評価が行われる。

このときの学習はいわゆる教科学習に限定されず、実に様々な活動が「学習」として評価される。例えばテレビのトークショーを見るのは Social Study としてカウントされ、朝食の卵料理は Independent Living として評価される。そしてこの「学習」時間の長さによって単位が認定されるという仕組みである。卒業に必要な学習

時間は以下の通り。

必修科目		単位数	時間
国語		4.0単位	720時間
英語		2.0単位	360時間
スピーチ		0.5単位	90時間
数学		2.0単位	360時間
社会	公民(政治)	1.0単位	180時間
	歴史	1.0単位	180時間
	地理	0.5単位	90時間
理科		3.0単位	540時間
体育		1.5単位	270時間
選択科目		6.5単位	1170時間
合計		22.0単位	3960時間

（インターネットスクール「風」p21）

2-3 Compuhigh

Compuhigh は、Clonlara のサイトによれば first-ever(史上初)のインターネットサーバ上にできた高校である。このプログラムには、 Home Based Education Program の学生となり、1コース(教科のようなもの)当たり $50 の extra fee を支払い、パソコンとモデムを使うことで参加できる。

Compuhigh が参加しているネットワーク上のプロジェクトは IERAN(International Education and Resource Network) と Global SchoolNet である。

compuhigh では、mentor と呼ばれる指導者のもと学習プログラムを練る。また、それとは別にオンラインコミュニティの中で自分の学習へのアドバイスを求めたり、他の学生の学習にコメントすることができる。

3. インターネットハイスクール「風」

日本でこの Compuhigh プログラムを利用できる学習システムとして、鎌倉市に本拠地を置くインターネットハイスクール「風」というものがある。こうした形の教育では日本では学校法人として認可を得られないのでいわゆるフリースクールなのだが、すべて日本語を用いて、アン・アーバーとなんら変わらない学習環境を提供してくれている。「風」ではサポートティーチャーと呼んでいるが、Compuhigh と同じように学習のカウンセリングを行う教師と協力してカリキュラムを作成し、自らの学習をインターネットを通じて報告していくというスタイルである。

ただ、日本ではアメリカほどコンピュータもインターネットも生活に根ざしていないので、このシステムの立ち上げ時には設計も担当した株式会社ケイネットが各家庭におけるサポートも行ったようだ。

4. 考察

以上、インターネットを利用したオルタナティブスクールの学習システムの設計の一例を見てきた訳だが、このシステムは非常に大きな特徴を備えている。

まずひとつは、生徒と親と教師が協力して学習計画を建てることである。通常の学習システムでは教える側と学ぶ側がはっきりと分かれており、学習内容やその順序はすべて教える側が掌握している。しかし Compuhigh ではこのような特権的な立場というものはなく、学ぶ側の興味・関心・問題意識を大事に、Interactive にカリキュラムが作成されている。

次に、学習の評価が非常に柔軟だということである。テレビを見ることも朝食を作ることもトランペットの練習をすることも「学習」として評価される。学習プログラムの設計を真に Interactive なものにすることに、この評価の方法は大きく寄与している。

またシステムそのものの特徴とは言えないが、こうした学習の成果が他の教育機関においても正当に評価されるという点は、Alternative な実践にとって大きな意味を持っているだろう。日本でこうした学習システムが定着するかどうか、この辺りがポイントになってくるのではないか。

〔参考文献〕

・CLONLARA SCHOOL HOME BASED EDUCATION PROGRAM(http://www.clonlara.org/)
・『インターネットハイスクール「風」』(柳下 換,ダイヤモンド社,1998)
・インターネットハイスクール「風」(http://www.kaze.gr.jp/)